
夏恋

浅色ミドリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏恋

【Zコード】

N3187A

【作者名】

浅色ミドリ

【あらすじ】

夏休みに里帰りする友花。初めて見かけるホタルをきっかけに南と出会つ…。

夏恋

『香田 南』 18歳

市内の専門学校に通う若者。

去年の夏までは……。

「南ー！ 置いてくよーー？」
「はあはあ、ちょっと…待つてってばっ」
「はやくしゅうーーー」

南と一人の女性はそんな会話を交わしながら坂道を駆け上がる。浴衣姿で二人は人混みから外れたところにいた。

「おつそいぞ～」
「…美帆」

南は肩で息をしながら美帆と呼んだ女性を見上げる。

「ん？ どしたの？」
「僕が体力無いの分かつてやってるだる、…はあはあ、…つたく
もう」
「あら、ばれちゃった」

隠しもせずチロツチと舌を出して、笑う。

ひゅーん。

どかーーん！

唐突に、二人の背後で花火があがる。

「わー！きれい！！」

花火の光が当たつた美帆の横顔が、南にはとても素敵に見えた。

「綺麗だね……」

花の幻想が南を心の底から酔わせた。

このまま二人の時間が続していくかのように思えた。

「ね。別れよつか。私たち」

駅のホームで、突然美帆は南に告げた。

「…え？」

「好きな人が出来たんだ…。ごめん」

「……」

何も言えないまま、ずっと美帆を見つめていた。

電車が彼女を連れ去った後もずっと、かつての恋人のいた場所をみつめていた。

夏休み。

学生達には潤いの1ヶ月間。

「あつ~…」

しかし、このだらしない格好で木の陰でうちわを扇いでる少女にはあまり良いものでは無いようだ。

この辺りの地域は熱がこもりやすく、夏はほとんど蒸し焼き状態になる。

白いワンピースで長い髪を麦わら帽子で覆っているその様子はまるで、一昔前のお嬢様のようでもあった。実際には平凡な家の生まれで、たまたま祖父母の実家の田舎に帰っていたのである。

「虫嫌い…」

意に反して鳴り続ける蝉の声に、より一層暑く感じる。

「あいつも今頃、街で遊んでるんだろうなあ…」

暑さとやかましさに顔をしかめながら、あいつのことを見つた。あいつとは、先日別れた彼氏のことで、相手方の不倫が原因だった。

心の底では別れたくない気持ちが少なからずあった。

初めて好きになつた人だった。

そして、初めて裏切られた人だった。

「何やつてんだろ…」

空は青い。

雲は白い。

「私もこんな澄んだ広大な心持つてたらなあ」

自分の台詞に苦笑する。

「私は…」

昼間の木陰は思つた以上に快適だつた。
そのままつづらつらじてきて、彼女の思考はそこで止まつた。

みんみんみんみんみんみん。

彼女が目を覚ましたときにはもう夕刻を少し過ぎたくらいだった。

「あ、山は暗くなるんだっけ…」

今まで暮らしていた都会と違つて、暗くなると明かりが全くない。だから早めに帰つてこいと親に言っていたのだった。もたれ掛かつて いた木の幹から立ち上がり、軽くお尻をはたくと、麦わら帽子を押さえながらの方へ走つた。

幼い頃はよく来ていた祖父母の実家、今も変わらずの景色だけれど、小学校高学年からずつと都会で暮らしていた彼女には迷つてしまいそうなくらいだった。

「田舎で少女失踪…とか…シャレになんないし……」

一人「」

息を切らせながら、川沿いの丘を駆けていった。

もうすっかり暗くなり、辺りは夜が押し寄せていた。しかし予想していた以上に、周りの風景が、山が、木々が、道が見えた。

星や月の光が照らしていくれたためである。蛍光灯育ちの彼女にはちょっとした感動でもあつた。

ふと横を見ると、河原の辺りに光が集まっている。

(… なんだろ「」?)

興味深くそつと近づくと、その光は動いていた。

「キレイ…」

「螢を見たことがない？」

「つ？！」

飛び交う光の中に、突然人が現れたように見えた。

実際には、始めからそこにいたのだが、彼女が光の方に夢中で気づかなかつた。

相手は苦笑しながら言つ。

「そんなに驚かなくとも…」

「…あ、ごめん…なさい」

川辺に光の中で立つている目の前の見知らぬ人が、妙に幻想的に見えた。

「…あの…ホタルつて…？」

「あははは、そうか！螢を知らないんだ」

笑われたのが何となく不愉快でむすつとして睨みやつた。

「あ…はは、ごめんごめん。螢つていうのはね、そこの、これ、飛んでる光！」

声の主は楽しそうに続ける。

「まあ虫の一種なんだけど、こつやつて夜には光って飛ぶ夏の虫なんだよ。てっきり地元の子かと思ってたから、ごめんね？」
「あ、うん……いいですけど……」

睨み付けたのが分かつたらしい。

こちら側からは相手の表情は逆光になつてるらしく見えなかつた。

「ホタル……」

月明かりの下の幻想的な光。

まるで吸い込まれそうな空間にいるよつだつた。

「こんなキレイな虫、都会にはいないから…」

「そうだね、都会の虫は汚れてる…。虫も、空気も、人間も…」

その声が妙に悲しそうに聞こえたのはどうだろ？

「あの…？」

一瞬だけこちらを向いて微笑んで、また螢達の方を向いて、その人は言った。

「螢っていうのはね、自然の川辺、それもとても綺麗な川でしか生きられない虫なんだ。籠に入れて都会に連れて帰つても、そう長くは生きられない。そして年々自然が減つて…環境も悪くなってきてるから螢の数も減つてきてる」

確かに年々自然は減つていて。

しかし、見回せば山ばかりだと自然が減少してるようには思えない。

「……こんなにキレイなのにね」

また声が悲しくなった。

「ま、そんな」とぱざりと口をつぐむないかぱざりだつて事じやないけどね」

一変して声がさつきの調子に戻った。

少女はさつきのが聞き間違えたのかと耳を疑つた。

「垂つてひょうやつて手を伸ばすと寄つて… つてあわああ

「あつ…」

足下の石に躊躇いて、転びそうになつたその人を助けようとしてひょうちも躊躇いたため、一人とも川に落ちた。

「……」

一瞬何が起つたか分からず、お互を見て呆然としていた。数秒送れて、二人同時に笑い出した。

「ふ

「あはははーまさか君まで落ちてくるなんて、ははは

「…はあはあ、だつて、落ちたからつい、あははは

川の水は意外に浅かつた。

足の膝くらいまでの水位で、夏の川の水がほどよく気持ちいい。

「もつづぶ濡れだなあ…。つと

と言つて立ち上がり、まだ座り込んでる少女の方へ歩いてきた。

「大丈夫?」

やつぱり手を差しだした。

「あ…、ありがと…」

手を受け取り、立ち上ると田と田があつた。

「君、名前は？」

「『三上…友花』」

「僕は香田 南。友花ちゃんはしづらへいの田の田の？」

「私は、夏休み中はこっちにいるから…」

「そつか、僕もしばらくはこっちにいるからまた会うかもね」

南が微笑むと、友花も自然と顔が笑みの形になつた。

「つて、うわあ…すっかりずぶ濡れだな…濡れたままだと風邪引くからもう帰ったほうがいいよ」

「うん、そうする…クシユン…それじゃまたね、南さん…」

「あはは、お大事に〜」

苦笑を浮かべながら南は手を振った。

夏恋4（前書き）

すみません、書き直しました…。前のよりもだいぶ、感情移入しやすくなつたと思ひます（？）

あれから一日。

またあの人に会えるかもしないと思つて夕方に螢の河原へ通つて
いた。

しかし、その人は現れず、あの時見た螢も見かけなくなつた。

「夢見がちな少女…か」

自嘲氣味に笑つてみる。

友花は夕方の川の底をのぞき込んだ。
長い髪をピンで留めた女が映つてゐる。

「…不細工な顔」

川面に映る自分を見てそつとつ。

何となく子供扱いされてたのは氣に入らなかつたけど、話をして
て妙に楽しかつた。

夜の影のせいであまり顔は覚えてないが、螢の光で神秘的にも見
えた。

自分でも分かつてゐる。

どうせ一時の空想に過ぎない」とくらゐ。

「夢の空を歩く君の そばにいるガラスの靴は 離れられないだけ
なんだ〜」

昔聞いた歌のフレーズを口ずさむ。
もうなんていう歌かも忘れた。

歌っている人ですら覚えてない。
でも、それが今の気分だった。

「少女は川原佇み 空虚を想つ ここが命の始まりの場所とも知らず 君は唄う」

ふと背後から詩が聞こえた。
びっくりして振り返ると、こないだの人が空を見上げていた。

「あ……こんにちは
「ほんにちは。また会つたね」

軽く挨拶して南は横に座った。
その距離が微妙に友花には恥ずかしかった。

「聞いて…ました?
「うん、いい声だね
「……」

南は笑つてみせたが、友花は自分が赤面してゐるんじゃないかと思つ
くらゐ体が熱かつた。

(はずかし…)

必死で「まかそつと話題を振る。

「あ…命の始まりの場所?」
「あー…、うん~と…あまり深く考えないで」

今度は苦笑い。

「う、うん」

「友花ちゃん、だつたよね？」

「はい…？」

「よくここに来るの？」

言われてちょっとドキッとした。

田の前の人には会えるかもしれないって思つて来たなんて言えない。

「あ、うん…。時々」

内心の動揺を隠そつと必死で笑顔を作つた。

「へえ、そなんだ。僕はこないだの会つた夜、あの田に来たば
っかりなんだ」

「あ、私も」

「え？」

「私もその日にこつちに来て、おばあちゃんの実家がこつちだから
友花は、南がだいぶ前からいたのかと思つた。
意外な接点を見つけられて少しうれしかつた。

「そつか、おばあさんがいるのかあ。夏休み中ずっとこつちに？」

「うん。ずっと」

「1ヶ月も友達と会えなくて寂しくない？」

「いつものことだから」

そつと立ち上がりて川面を見た。

「それに、今は誰とも会いたくなかったから

二人の間を夏の風が通りすぎた。
河原の風はひんやりとして心地よい。

「そつか、ごめんね」

「あ、違うんです！ 南さんは違うんです！… その、友達に会いたくなかったっていうか」

立ち去るとしてたところを、慌てて友花が止めた。
初対面に近い南に誤解されたくなかった。

「あ、うん。… そゆときつてあるよね。スランプになつてたり、周りの「じちや」じちやしたことがやになつたり、好きな人にフられたり」「私、ついこないだフられたんです」

「…え？」

話題を変えようとしてただけだったのに、いきなり爆弾を引いてしまつた。

ともあれ、南は気まずい気分になつた。
謝ろうとしたら、友花が先に口を開いた。

「あ、大丈夫ですよ。南さんは気にしないで」

「あ、うん…」

そう言われては黙るしかなかつた。

彼女なりの配慮だらう。

「彼とは、2ヶ月付き合つてました。優しくて、大好きでした。でも…」

そう言つて、友花は川岸のきついまで来て、しゃがみ込んだ。

「彼…、浮氣してたんです。ファミレスで別の女の子とキスしてるのが見ちゃって、問いつめたら…」

「…」

「そういう堅苦しいのウザいつて言われて、お前と一緒にいると思苦しいつて言われて、逆ギレされて、別れちゃいました」

ぴちゃん。

見ると、川に波紋が広がっていた。

友花が川に石を投げ込んでいた。

彼女は立ち上がり、川に向かつて急に大声で叫んだ。

「ばかやろ〜〜〜！」

振り返つた友花の顔は笑っていた。

「あ〜、すつきりした。やな男つているもんだね」

笑顔で南の隣に座つた。

南にはその顔が強がりだと分かつた。

「なんであんなやつ好きになっちゃったのかな。私つてばかだね
」

友花は背伸びをして背中から後ろに倒れ込む。

「つづつした石の感触があつたけど、特別気にはならなかつた。服が汚れるのも気にならなかつた。

「はあ〜、なんでだろ

オレンジ色の空が自分の心を映してゐるよりも思えた。
南は何も言わずに、そんな友花の顔を見てゐる、優しいような、悲しいような表情で。

「…南さん？」

その顔に違和感を感じたのは何故だろう。
不思議な違和感だった。

でも悪いものじゃない。むしろ心地よかつた。

「ほんとに彼のことが好きだったんだね」

言われて、心がズキンときた。

心の奥を見透かされたような気分になつてた。

「実はそんなに好きじゃなかつたのかも
「自分を誤魔化しちゃだめだよ」

そう強がつてみせたのも分かつてゐるような表情、声のトーン、言葉。
自分の心の内が知れるのが怖くなつて、頭に血が上る。
上体を起こして反論しようとした。

「そんなこと…」

「僕は…」

決して強くはない、大きくもない声に友花の言葉は中断された。
一呼吸置いて、南が口を開いた。

「僕は笑つたりしないよ。君と同じだから」

その言葉の意味が友花には分からなかつた。

「君には、自分に正直でいてほしいから

その南の言葉の意味はよく分からなかつた。

でも、友花は流れ出る涙を止めようとした。

いつの間に流れていたのだろう、気づいたら南に泣きついていた。

少しだけ、なぜ初対面の彼を探していたのか分かつたような気がした。

たくさん泣いた。

友達の前でもこんなには泣かない。

でも、彼の前では……。

（なんでこんなに泣いちゃったんだろう……）

不思議と、南には好意を持つていた。
なぜかは分からぬ。

前の彼氏にフラれて精神的にまひってるはずなのに。

（南さんといふと、胸が高鳴る……）

今は南の座つてる隣で横になつてゐる。
落ち着いてみると、こんなにも人の前で泣いたことは無かつた。
なんだか急に恥ずかしさがこみ上りてきた。

「冷えてきたし、そろそろ帰りつ……？」

声を掛けようとして南の方に顔を向けると、友花の肩に南が寄つて
きた。

「あ、あの……！」

突然のことに戸惑つたが、様子がおかしかつたので顔を覗き込むと、
その顔は青白かつた。

「だ、大丈夫ですか？！」

「あ、はは・・・」「めんね、だいじょうぶ…だから、ゴホッゴホッ」
「何言つてるんですか！体もこんなに冷たく……え、あ…と、
き、救急車！すぐ呼びますから！…」

大丈夫なんて無理しているが、危険な状態なのは目に見えていた。
夜風に長く当たつていたせいか、体も冷たい。

「南さん……みなみさん……」

しばらくして南はふもとの病院へ搬送され、緊急の手術が行われた。
友花は手術室の前のベンチに座り、体を震わせていた。

（私のせいだ・・・ずっと夜風に当たって・・ずっと私に付き添つて・・・・・・）

涙が溢れてきた。

どうしようもない、どうすればいいのか。

行き場のない大粒の涙は友花のほおを伝つて南の顔に落ちた。

夏恋6（前書き）

少し不思議な物語。

(行かないで・・・・美帆・・・・・)

扇が閉まつて、それは彼女を連れて行く。

ガタンゴトン、
ガタンゴトン、

(.)

「わよなう・・・・・・」

そう言つた彼女は無表情だつた。

そりで そんがさくにかに 大頭の口をくまくお酒呑いていた。

電車が彼女を連れ去ってしまった。
まるで母親とはぐれて迷子になつた子供のように、ずっと一人で立
ちつくりしていた。

何がどうなつてしまつたのか分からなくて、ただ彼女が遠くへ行つてしまつた。

それだけが分かつて、それがとても悲しくて。

(美帆おおおおおおおお ! ! ! ! ! ! ! ! ! !)

二つの間にか、辺りは暗くなっていた。

(ドリ・・・?おかあさん・・・・・?」「、ドリ~)

暗い道をひたすら走って探し回る。

(ハアハア・・・い・・・やだ・・・じわい・・・・!~)

どこまで走っても続いていく闇。

止まつたらもう動けなくなつてしまいそうな気がした。
何に追われてるのかは分からぬ。
でも何かに追われている気がした。
怖い何か。

連れ去つてしまいそうな、何か。

捕まつてしまつたらもう逃げ出せない。

(いやだ・・・いやだ)

どうして逃げなければならないのかなんて分からぬ。
なぜ追われているのかも分からぬ。

(いやい・・・いやい・・・いやい・・・!~)

ひたすら怖い何かから逃げた。

走つて、走つて、どこまでも走り続けた。不意に足下がとられて、転んでしまった。

辺りは一面の真づ暗な闇。
音は自分の声しか響かない。
寒くもないし、暑くもない。
風も吹かない。

それでも。

その何かが近づいてくる気配だけはある。

息苦しい、とてもなく怖い。

嫌なモノ
ただそれだけは感じる

そうして、闇が蔓のように足に絡みつき、伸びていった。

絡みつく闇を振り払おうと体を動かすか、走り疲れきった足は、手は、言うことを聞かない。

闇の蔓は全身を覆い呑みし、そのまま見えない闇に引きずり込んでいた。

(つあああああああ ! ! ! ! !)

「…………ん…………みせんー。」

(…………)

「南さんー。」

はつとして、目が覚めた。

「南…………ん…………」

声のした方を見ると、友花が心配そうに泣きながら、口ひげを見ていた。

「よかつたあ…………」

「友花…………ちゃん？」

そう言って、寝ている南の体に抱きついた。
一瞬何が起こったのか分からなかつたが、少しして落ち着いたらすぐ把握できた。

(ああ・・・・戻ってきたんだな・・・・)

独特の薬品のにおい。

真新しいシーツのかおり。

白い壁、白いシーツ

まぎれもない病室にいるのだった。
友花の方を見やると、頬に違和感を感じた。
どうやら寝ながら涙が溢れていたらしい。
それで心配になつたのであるう、友花があんな顔をしていたのだった。

「友花ちゃん・・・・・？」

そういうて、彼女の髪を撫でた。

しかし、微動だにしない友花の様子が少し違和感を感じた。

「友花ちゃん・・・・・？」
「・・・・・」

静かに寝息を立てて眠つていた。

突然寝てしまつて驚いたが、ずっと付きつきりで看病なさつてたんですよ、と近くにいた看護士さんが退出際に話してくれた。そつと髪をかき分け、寝顔を覗き込む。

友花の穏やかな寝顔を見て、安堵した。だが、目の隈や、以前見た時よりだいぶ青白い顔の色に、疲労の色が濃く現れていた。

「こんなになるまで・・・ありがとう」

ぽつりと呟いた時、ぱっと友花が顔を上げた。

「あ・・・、私寝ちゃって・・・」

南の顔を見て少し恥じらい気味に目を伏せた。突然、友花を抱き寄せ耳元で呟いた。

「うんん、ずっと僕のことを見ててくれてたんだね・・・。ありがとう・・・」

それを聞いて安心したのか、南の腕の中で再び眠りについた。

緩やかな日差しが真っ白なシーツの上に降り注ぐ。窓の外から見える庭は自然が多く、時折小鳥のさえずりすらも聞こえてくる。

「お水、取り替えてきますね」

窓際の花瓶を持ち、友花は蛇口のある方へ向かった。南は花瓶の無くなつた窓を見つめる。

真っ白な雲が四角く切り取つた青い空に映える。

清々しい陽光が、今は逆に眩しいくらいだ。

「何見てるんですか?」

花瓶をもとあつた場所に置き、同じように窓から空を見上げた。

「うん、特に」

そつ言つて友花に微笑んでみる。同じように友花も微笑みを返す。

少しだけ、穏やかな時間が流れた気がした。

「「ホッ、「ホッ」

「南さん！？」

咳き込む南に駆け寄つた。

心配そうに見つめる友花に南は

「大丈夫」と笑つてみせた。

咳がおさまった南を、友花は暫く無言で見つめていた。

「……………どうしたの？」

「南さん」

意を決したように、友花はずつと気になつてた事を聞いてみた。

「南さんの病気って、そんなに悪いの……？」

南は、友花を見つめたまま固まつた。

しばらくして、南は重い口を開いた。

「…僕は、末期癌なんだ」

そう告げて、精一杯笑つたつもりだつた。

けれど友花には、とても辛そうな顔に見えてならなかつた。

そして唐突に、南に抱きついた。

なぜだか自分の事のように不安になつた。

「南さん…」

「「」めんね、友花ちゃん…」

友花の髪を優しく撫でる南の頬から涙が流れていることに、南自身も気付いてなかつた。

それから色々南自身の事を語ってくれた。

2年前までは至つて健康だったが、突然身体の調子が悪くなり、病院で検査したところ末期の癌だと診断されたこと。

そのせいで病院暮らしを続けていたこと。

今年の夏は体調が良かつたので外出を許可され、あの山にいたこと。

「元々は友花と同じ都会育ちだが、小さい頃から自然は好きだったんで雑学は多いこと。

「もうホタルもいないのかなと思つてたんだけど、あんなにたくさんいたんだね」

「うん」

もう余命幾月もないというのに、じつじつこの人はこんなに笑つていられるのだろう。

そう思うとどんどん胸が締め付けられる気がした。

彼の笑顔は好き。

でも今はとても、切なくなる。

友花は無性に泣きたい気持ちを必死に抑えていた。

口数の少ない友花の様子を、少しだけ目を細めて眺め、また視線を病院の壁の方へ向けて南は言つ。

「末期癌だつて、親から聞かされた時さ」

『癌』といつ言葉に反応して顔を上げる。

「正直なところ、やつぱり怖かったね。…………あ、でも最初のうちは何だか実感なかつたもんだから戸惑つてたけど」

やはり少し苦笑いで話をする。

「日が経つにつれて、ずっと病院のベッドの上だから嫌でも考えちゃうんだよね。もうすぐ死んでしまうのかなつて。そうするとやつぱり、怖くなつていくんだ」

「南さん……」

「その思いも吹つ切るわと思つて、体調が良いつて言われたから必死に先生にお願いしたんだ。渋々OKだしてくれてね。それで」

友花のほつを見ると、今にも泣きだしそうだつた。

「君と出会つた」

南が作つた精一杯の笑顔だつた。

「うん」

その笑顔に応えたかつた。

その人が好きだつた。

胸が、苦しめられる想いが溢れそつだつた。

笑顔の主は続ける。

「海にも……行きたいな」

「海？」

「うん、海」

「……また、行けるよー」

そうだね、そう言つてすぐに氣を失い、南は再び集中治療室へ運ばれた。

幾つもの冬を越し、春を過ぎ、また夏が訪れた。

セミはせわしく、夏を告げる。

今年もどうやら暑くなりそうだ。

それはこつもようつるセミの声が示してくれる。

あれから私は高校を卒業して、彼と同じ専門学校へ行った。特別、何か目標があつたわけでもなく。けれど、同じ時間を辿つてみたい、そんなロマンチストな考えは誰にも言えない。

「あれー？ 友花泳がないのー？」

「うんー、ちよつと描きたい絵があるからー」

砂浜の向こう側の友達に返す。

今日は学校の友人と海に泳ぎに来ていた。

パラソルの下で手帳サイズのスケッチブックを開く。

海に来たのは、泳ぐためでなく、海を描きたかったから。

手術は夜中かかった。

いつの間にか寝ていたらしく、目が覚めた頃には夜明け頃だった。だがそこで目にしたのは、管に繋がれた南ではなく、もう目の開

かない彼がそこにいた。

手術は成功した。けれど、1時間したらまた容態が急変し、そのまま息を引き取つたといつ。どうしてといつ思いと、涙が止まらなかつた。

南の両親から、一枚の絵を渡された。
あの子がもし死んだら渡してほしい、とそういう告げられて。
そこに描かれていたのは、夜の山の景色と、川縁。そして幾つものホタルたち。

その絵は今は友花の部屋に飾つてある。

海を描く手を止め、一息いれる。

空を見上げると、日差しの眩しさに眼を細める。

「私は、彼の生きた証を忘れない

青々とした空は、どこまでも繋がつてゐるようだつた。

夏恋10（後書き）

長い時間がかりましたが、なんとか終了しました。
最後までお付き合い頂きありがとうございました。
最後の方はやつつけ感たっぷりですが、また別の作品でお会いしま
したらよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3187a/>

夏恋

2011年1月1日02時46分発行